東成の歴史

シリーズ No.8

“昭和のひがしなり”＝戦後の復興から近代化へ＝

大阪府文化財愛護推進委員
東成区コミュニティスクール“歴史シリーズ”講師　友田　譲

昭和20年8月15日の終戦を機に、我が国はかつてない未曽有の変革をしいられることとなります。

当区も終戦まぎわの6月15日の空襲で、東小橋、中道、中本方面で、約6,000戸にわたる全焼家屋の罹災を受け、8月14日の爆弾攻撃で森の宮方面では潰滅的な被害をこうむりました。

区民の生活面に於いても、衣・食・住すらままならぬ状況下にあって、東成区の復興に立ち上り、地域にあっては、日赤奉仕団を始め、各種の社会福祉関係の各団体が発足し、住民間の和協の精神にて連帯感を盛り上げ、大阪市の復興都市計画にそい、先ず道路整備が進められ、交通網の市電・市バスの各路線も追々と復旧。新線も開設され徐々に復興の兆しが見え始めてきました。

このようななか、昭和25年9月3日大阪を襲ったジェーン台風や、その後の第二室戸台風による大きな災害を被り、又大雨毎の水害による家屋の浸水に見舞われ、水害対策は当区にとって急務な問題でありましたが、城東運河の改修や、城東ポンプ場の設置。下水道の完備等により、次第に水害の問題も解決していき、快適な生活が送れるようになってきました。

一方戦後の教育では、六三三制の導入による学制改革がなされ、國民学校が小学校と旧称にもどり、新制中学の開設に伴い、当区では、本庄・玉津・相生・東洋の4中学校の開校をみるに至ったが、当初は校舎や運動場の問題が山積し、関係者の苦労も一人（ひとしお）であったと思われます。

街の様子も次第に整備される中、西方を流れる“猫間川”が埋立てられ古くから世に知られた「石橋」が姿を消すなか、水道局裏の井路川改修中に古墳時代の独木舟が出土し、後年地下鉄千日前線工事現場からクジラの骨が発見され、改めて東成の古さを物語る貴重な資料となりました。

一部焼土と化した地域も漸次住宅が復興され、商・工業と住宅の共存する町へと発展し、今里新橋通りや今里新道筋、鶴橋卸賣市場を中心とした商店街が次々と整備され、やがて地下鉄の中央線・千日前線の開通へと発展を続け、成人病センターの開設や、阪神高速道路の開通により一段と近代化が進み、大阪市の東部での重要な位置をしめる東成区へと更なる発展へと向って行きます。

ご意見、ご希望は・・・・・市立東成会館 ㈶東成区コミュニティ協会 TEL6972-0717 FAX6972-0838